

# 研究室への置き手紙

2024.4 Graduation special

- 修了生から研究室へのメッセージ
- マガジン編集部的一年を振り返る
- 次世代の編集部へ

vol.344



## 修了生から研究室へのメッセージ

2024年3月21日、都市デザイン研究室から8名の学生が修士課程を修了した。修了式後にはキャンパス内のレストランにて追いコンも開催され、研究室メンバーに我々8人の門出を祝ってもらった。

追いコンでは、研究室メンバーから修了生・卒業生へのプレゼントの贈呈や、修了生から先生方・研究室へのプレゼントの贈呈、思い出の写真やメッセージが詰まったビデオの鑑賞などが行われ、研究室メンバーで過ごす最後の夜に相応しい、温かい会となった。

会の終盤には、先生方からメッセージをいただいた。中島先生からは、都市デザイン研究室でこれまで一貫して取り組んできたものとして、「都市デザインの民主化」が挙げられるのではないかとのお話をいただき、私たち修了生の都市デザイン研究室での二年間の活動の根本に立ち返るような、壮かつ今後長い時間をかけて考えていきたいテーマをいただいた。本特集では、研究室を離れる8名から研究室へと題して話された、修了生からのメッセージを掲載する。



### 宮園 侑門



年度末の勢いで答えのない問いに対し少し自問自答したいとおもいます。「アーバンデザインの民主化」を聞いたとき、いくつかの思いが浮かびました。というのもアーバンデザインが民主的ではなかったことはあったのかということです。私は周りの先達たちで自身を間髪なく「アーバンデザイナー」と名乗る方を両手で数えられるほどしか、まだ、知りません。それくらいにまだ、定まっていないもしくは変動するものだと思います。

そもそも、都市デザイン研究室の用いる「都市デザイン」は思っている以上にドメスティックな文脈を持っているのだと思います。都市に関わる営為は数多とあるなかで、都市をデザインすると表明するのですから。そして、これはデザインとはなにかということにもつながると思います。

後輩たちの興味関心を見ると、より社会的な問いについて語ることが多くなったように思われます。一方で、それらをゼミやスタジオで語れるような土壌が育っているかという、それは疑問が残ります。我々はあふれる都市課題に対して、安全圏から消費していないかという問いを持ち続けなければならないでしょう。

そういった意味では、我々は民主化するという立場ではなく、Urbanismのなかでどのように振る舞うのか、より大海のなかでどのように専門性を明確化するかという生存戦略の話でもあるような気がします。

スペースがないので議論を端折って、私の個人的意見を述べます。都市デザインがアーバンイズムとほぼ同義であるのならば、より多くの現象を受け止めながら都市を漸次的に改善していく試みであるならば、我々はより一層技術をバックグラウンドに持った何かのプロフェッショナルになるべき・表明すべき・意識的にあるべきではないでしょうか。それは花屋なのかもしれないし、電気工事なのかもしれないし、広場の仮設利用なのかもしれない。常にあるまいな都市や都市デザインと自分の働きかけがどのような関係性にあるかを意識し続ける者がアーバニストであり都市デザイナーなのではないかと信じている。



### 唐木田 耕大



周周りがほとんど都市・建築の出身で、農学部出身の自分にとっては毎日が発見ばかりでした。外からの視点で見ると、この研究室の良いところは自由さと手を動かせることだと思います。東大生特有の根拠なき万能感が無く、周りの人の意見を素直に吸収しながら、手を動かして色々なアウトプットを出し続けているのは、すごいと思いました。

振り返ってみると本当にあっという間の二年間でした。プロジェクト、スタジオ、研究などで種類の違うアウトプットに自分なりに挑戦してきたいま、改めてインプットの重要さを感じています。コンペや授業などで社基や公共政策大学院の人と一緒にあった時に、同じ対象を見ても全然考え方が違って、都市デザイン研究室的な考え方がいつの間にか内面化していたことに気づかされました。目の前の大量のタスクに流される毎日の中でも、模型は誰のために作るのか、まちづくりのコンセプトはビジュアルで定義するのか、など、自分たちのやっていることを一度相対化することで、より説得力のあるアウトプットを作れたかもしれないと感じています。相対化のためには、本・論文を読む、授業・講演会を聞くといった古典的なインプットも重要だと改めて感じています。専門を深めつつも俯瞰的な視点を忘れず、自らの立ち位置を定位し続けるというのは自分の中での今後のテーマだと感じています。

最後になりますが、みなさまには大変お世話になりました。マイペースに過ごしてしまった分、色々ご迷惑をおかけしたかもしれませんが、楽しく充実した日々を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

## 佐橋 慶祐



まず、体調不良により追いコンに参加できず、文章のみでのメッセージとなつてしまい、申し訳ありません！本当なら直接お話したかったところですが、

さて、2年間の研究室生活を振り返って、とても強く感じていることは多くの人から刺激を受ける環境であったということです。デザ研は、学部の際の研究室と比べても規模が大きく、単純に多くの先生方・先輩・後輩と関わる機会もあることに加え、それぞれのプロジェクトで多くの地域の方々と接する機会があり、普段の学生生活だけでは生まれなかったような交流が多々ありました。

様々な価値観、感性、関心を持ったデザ研の人たちには驚かされ、結果的にそれが自分とは異なった行動、成果、進路という形で表れていることを感じました。ついこの間の卒業旅行の韓国でも絶対自分だけでは候補にならなかったであろうスポットがいくつもあったのが印象的でした。

プロジェクトにおいても様々な考えを持った地域の方々と一緒に議論することが多く、多様な意見が飛び交う面白さがありつつも、すり合わせていく難しさで苦しめられるなど、合意形成が必要になるまちづくりの一部分を実感することができたと思っています。

今は、このような多くの刺激、発見、気づきが得られた環境に感謝したいです。加えて皆さんに伝えたいのは、せっかくこの研究室にいるんだったら自分が参加しているプロジェクト以外の地域に訪れることも結構新しい発見があったりするのでおすすめしたいです（僕は富士吉田に何回かまったり過ごしに行っていました）。それでは、先生方をはじめ、デザ研の学生も含め、2年間ありがとうございました。



## 高野 楓己

修士の2年間、ありがとうございました。

2年前はほぼ家で過ごしたコロナ禍が明けて、対面の機会が増えてきた頃で、その時に新潟から東京に来て都市デザイン研究室に入りました。最初は、環境の変化やスピード感の速さに目が回るようでした。温かく受け入れてくださり、ありがとうございました。

入学してすぐ、参加するPJを決めて、マガジン編集部に参加し、授業も始まりと、よくわからないまま目まぐるしく日々が過ぎていきました。自分は知識も言語化能力も全然足りてなくて、先輩や同期に引っ張っていただきついていくのがやっとでした。自分のエネルギーの配分がうまくできず、上野PJを辞めることとなり、みなかみPJに集中しました。

この2年間、現場に浸かって活動させていただいたことが貴重な経験でした。PJで活動したみなかみ町、それから研究で関わらせていただいた花巻市と福山市で、多くの地域の方々と巡りあわせていただきました。PJでは、地域の方々と丁寧に関係を築いて、小さな取り組みを積み重ねることの大切さを身を持って学ばせていただきました。勉強させていただいたことを自分なりに形にして、地域に還元できればと思います。

研究室の同期の皆は温かくて、研究室にいくと誰かがいて安心しました。中島先生、永野先生、青木先生、先輩方には、ご指導いただき本当にありがとうございました。後輩の皆さんも、卒制を手伝わせてもらったり、PJの作業を一緒にしたりとお世話になりました。

これから私自身もっと柔らかく楽しんで、まちづくりに関わっていければと思います。支えてくださった全ての皆様に感謝申し上げます。



修了生を温かく見守る先生方

## 橋 俊輔



大学院生活は、これまでの人生の中で最も濃い2年間だったと思います。特にプロジェクト活動で経験したことは、社会人になるにあたって、間違いなくプラスに働くようなことばかりでした。学生の立場でありながらも社会人の世界を半分経験できたようで、かけがえのない2年間になったと思います。

都市デザイン研究室の先生方には大変お世話になりました。中島先生は、就職活動から直近の修士論文まで、あらゆるタイミングで頼らせていただきました。その度に、あやふやな状態であってもしっかり時間をとっていただき具体的なアドバイスをくださり、中島先生に相談に行けば停滞していた議論でヒントが必ず得られ、次へのステップが見出せることが大きかったです。

永野先生は、上野PJでここで語りきれないほどお世話になりました。上野PJは全てが永野先生を中心に回っていて、先生の人に愛される力、慕われる力にとっても憧れを抱いていました。まだ遠く及ばないですが、少しでも永野先生のコミュニケーション力に近づくことができるように努力していきたいと思います。

青木先生は、プロジェクトで直接関わる機会は少なかったですが、現役で設計事務所をやられているということで、そのような視点からの研究室会議などでの助言はとても有意義で、青木先生が今年デザ研に来てくださって本当に良かったです。

同期たちには、バックグラウンドも多様性に富んだ学年で、スタジオやPJなどで全員と深く関わることができたのは大変貴重な経験が得られました。皆興味ある分野や考え方が色々で、自分も勉強になることが多く、刺激を受けられる同期だったと思います。

後輩たちには、修士生活というのは学生でありながら社会人にちょっと足を踏み込める貴重な2年間だと思うので、是非今のうちに色々挑戦して欲しいと思います。修士の2年間をぜひ有効活用して、デザ研の発展につなげていただければと思います。



修了生1人1人から、研究室メンバーに向けてメッセージを送りました。



## 長谷川 帆奈

都市デザイン研究室のメンバーがそれぞれ自らの力で機会を掴んで、幅広く常に色々なことに取り組む姿、OB・OGの方が卒業後に活躍されている姿、研究室という集合体として蓄積されたみんなの功績や、その裏にある頑張りに背中を押され続けた2年間でした。

思えば院試で都市工学科に合格して、デザ研で学べることが決まった時も、入る前に何か少しでも成長できないかと思い毎日新聞を読んだり、苦手な英会話に通ってみたり（どちらも長くは続かなかったですが）、この研究室の存在自体が何となくいつも自分の励みになっていたと思います。それは憧れを抱いていた頃も、研究室のメンバーとして研究やPJ活動に精を入れていた時も変わらなかったし、入学したからといって甘んじることなく常に上を向いて頑張ることができたのは、やはり研究室のメンバーが沢山手を動かして、議論し合って、頭でよく考えて、素晴らしい成果につなげているのを日々間近で見れていたからです。今後もここでの二年間や、都市デザイン研究室の出身者であるという自覚が、私の励みになり続けるだろうと思います。

ありきたりですが、修了してみると改めて研究室の環境がどれだけ恵まれていたか、個性豊かなメンバーが集まり、気になる事例の見学に誘えば喜んで人が集い、深夜まで白熱した議論を止めずにくれるメンバーがいる環境が、修士二年間をどれだけ豊かにしてくれていたかを実感しています。

今後もこの場所で出会った沢山の同志を大切に、また、今度はこの研究室の出身者として恥じないよう、何事にも誠意を持って取り組んでいきたいです。二年間、ありがとうございました。

## 永井 鷹一郎



先生方はじめ研究室のみなさま、この2年間大変お世話になりました。

私が修士生活で最も多くの時間を割いたみなかみPJでは、街全体のビジョン作成、中心に位置する廃墟となった温泉旅館の敷地・建築の再生計画、短期的なアクションとしての社会実験を通し、都市や敷地、建築空間に対する統合的なアプローチ（都市デザイン）を学びました。学部の4年間では建築設計を中心に勉強してきましたが、この2年間で空間を計画するときの視点をより大きく広げることができた（特にスケールと時間軸、手法の点について）と思います。

一方修士論文では、テーマがなかなか定まらず苦労しましたが、常に研究会議で私の持っている問題意識を問いかけられ、最終的には自分の持っているそれと合致した発展性のある良いテーマに辿り着けたと思っています。これらは全て中島先生、永野先生、青木先生のご指導、ご支援があればこそでした。ありがとうございました。

最後に、私が修了できたのは同期の皆さんのおかげだと思っています。皆類稀な能力を持っていて、常に全てが私の手本でした。何より私が同期の皆さんから学んだのは、強い意志と熱量が可能性を広げることです。それを社会に出た後も忘れずに生きていきたいと思っています。二年間ありがとうございました。



## 平野 真帆

私はこの研究室でプロジェクトなどの物事に取り組むときに、自分がつくったものに対してこんなもんかと思われたり、期待を裏切るのが嫌だという気持ち強いあまり、モチベーションが低い時でも、良くも悪くも身を削って頑張ってしまう性格でした。だからこそ一人で頑張っている時間がとても辛かったり、手はよく動く一方でどうしてこんなに頑張っているのかわからなくなる時も多かったように思います。

そんな時に何が励みになったかと言うと、同期や後輩など周りの人が、大変なやり方でもいいから良いものをつくらうという言葉をかけてくれたりとか、こうしたらもっと良くなるんじゃないかという意欲的な言葉を伝えてくれたりしたことだと思っています。私たちがプロジェクトで取り組んでいた社会実験自体の目的は都市デザインの大きなものだけけど、それに向けて日々目の前のことを頑張ることの目的は、同じ方向を目指している仲間たちが共感し、あるいは否定してくれるというこの研究室での日常のやりとりの中から見出しだしたのだと思います。「どうしてこんなに頑張っているのかわからない」と思う時があるのも、私たちが取り組んでいるものが、長期的で大きくて明確なゴールのない、不確かな部分が多くあるものだからこそかもしれません。

そして、そのような言葉は先生方からかけられるのと学生からかけられるのでは違う意味、力を持つし、どちらも必要なものでもあります。後輩の皆さんはこれから大変なことがたくさんあると思いますが、お互いにそのような言葉を伝えることを怠らずに頑張ってください。ありがとうございました。



先生方には、睡眠の質を改善するパジャマを送らせていただきました！

素敵な会をありがとうございました！



今や 344 号まで蓄積された都市デザイン研マガジン。2023 年度初めには、Web ページ上での閲覧を快適にするために A4 片面の誌面デザインとし、企画発案から発行までの準備期間を長く設けるなどの変更が加わった。そのため、スクロールされることを想定した新しいデザインや、担当の長時間の企画・分析が光る読み応えのあるものも多く見られた。改めて一年分の記事を眺めてみよう。

## マガジン編集部的一年を振り返る

サムネイルを Click!



例年と同様、今年度の記事には大きく二つのタイプが存在した。一つは、研究室旅行特集や卒業 / 修士研究特集、各月の WEB MAGAZINE などといった研究室公式の出来事や慣習を個々のデザイン方針でアーカイブするもので、もう一つは各月の主担当が自分なりのテーマを決めて書き上げるものだ。

前者に関しては、例えば 6 月号の副担当企画で過去の研究室旅行について調査する際に数年前のマガジンを多く参照し、このようなアーカイブの重要性を再確認することができた。細かいエピソードや写真が豊富なマガジンを通して昔の研究室の情景が浮かび上がってくるくらい詳細に知ることができるというのは、研究室メンバー自身にとっても貴重で面白いことである。

一方で、後者の場合各月の担当は何を取り上げるのか、何のために取り上げるのかを毎月かなり悩むのが通例であった。そんな中でも発行することの価値を感じたのは、誌面を書くために研究室内で学生の主体の活動が発生したり、メンバーの一人が携わっている活動 / 没頭していることを他者が知るきっかけになったということである。2023 年度の中だと、7 月号ではまち歩き企画が開

かれ、8 月号ではオリジナルファニチャでのお茶会が開催された。研究室内外での自主的な活動や興味を内部で共有し、その様子を発信することは、本研究室の主体性やそこから発されるエネルギーを発信する媒体としてとても重要なことなのかもしれない。

▼次年度編集部員の一部のみなさん。これからは読者として楽しみにしています!



## 次世代の編集部へ

私たちと一緒に約半年間編集部として活動してきた新M2生。共にマガジンを作る中で感じた一人一人の強みについて、修士生数名で意見を出し合ってみた。これから先の号も、自分の強みを磨きながらも新しい姿をたくさん見せてほしい。

### 音山 尚大

▶ vol.337  
▶ vol.340  
▶ vol.343

- 最後まで検討し尽くす根性

自分の好きなテーマをただ深めるだけでなく、それを取り上げる意味が伝わるような構成を一生懸命検討してくれた。表現方法やグラフィックなど、細かいところまで悩み続ける姿勢が印象的です。

### 元吉 千遥

▶ vol.333  
▶ vol.338  
▶ vol.342

- 豊富なデザインの見出し

テンプレに囚われずに、全体のバランスを見ながら誌面を作るのが上手。10月号では、テーマカラーとの相性を考えながらオリジナルの表現を使いこなしていて、引き出しの多さに感服しました。

### 洲崎 玉代

▶ vol.341  
▶ vol.336

- 細部に宿る工夫と洗練

主担当の記事は前提となる知見が活かされた深みのある記事で、「都市」でありながらも今までにない切り口で読むのが楽しかった。よく見ると随所にテンプレから脱却したデザイン上の工夫が潜んでいて痺れます！

### 小林 夏月

▶ vol.335

- 聞き出す力と吸収力

誌面デザインにおいては、会議でのアドバイスをよく吸収して大変な作業も怠らない。プロジェクトの活動では住民の方など人の話を聞き出す力が特に光っていたので、インタビュー企画にも挑戦してみてもいい。

### 水野 謙吾

▶ vol.339  
▶ vol.342  
▶ vol.340

- 自らの足で見つけに行く

自分の足で稼いで、必要な情報を収集しに行く姿はとても頼もしい。ありきたりでない表現方法も多くみられたので、これからも初めて見るようなグラフィックをたくさん見せてください！

### 東條 秀祐

▶ vol.341

- 抜かりない調査と遊び心

ものごとを言語化し、文章で整理するのが好きという気持ちが普段のやり取りや発信からも伝わってくる。1月号で見せてくれたデザイン上の遊び心を忘れずに、その分析力を活かしてたくさん書いてください！

### 山田 真帆

▶ vol.343  
▶ vol.334  
▶ vol.339

- 「面白そう」を素直に形にする

AI企画やマガジンジャックなど、自身がやってみたい企画を通例に囚われずにやり切るところがかっこいい。特に3月号は自己内省という思い切った企画だったが、素直な文章には引き込まれるものがありました。

担当号を Click!

- ▶ 主担当
- ▷ 副担当

4月以降はこの7名に加え、新M1生も合流して新体制となる。現時点のメンバーだけでも驚異の女子率であり、賑やかなミーティングが期待される。今後は読者として、各担当が悩みながらもそのテーマやデザインに至った経緯を勝手に想像しながら、都市デザイン研マガジンを楽しみたい。



今後も都市デザイン研究室マガジンを  
よろしく願いいたします！